

神へと至る狭き門

富岡

国広

一、負の幼・少年期 ①

千葉県香取郡大栄町十余三（とよみ）。（後に成田市大栄町に改変）この地で、私は一九四七年二月一五日に、店を営む家に男ばかり五人兄弟の末っ子に生まれ、中学を卒業するまで育った。

父親の恐さを知らずに育った私は、精神的な脆弱さに加えて、我がままで、極度に内にも病的な一面を抱えていた。そして小学校入学と同時に登校拒否児となった。

学校が嫌で嫌で、毎日泣きながら家を出るのだが、兄や従兄弟たちとどんどん離れてしまい、途中から家に戻るといふ始末だった。それでも一年の中ごろからは泣くこともなくなり、なんとか通学するようになった。

しかし、私の学校嫌いは根が深く、同年年の一部の者を極度に避ける傾向があり、また集団で何かをすることが大の苦手であった。そのため特に学芸会や運動会のある日などは、決まって仮病を使い休むことが多かった。

そうした性格が災いしてか、同年年の者から言葉によるいじめや無視されることが多々あり、また一級下のある者からおどされたことも何度かあり、六年生最後の日には五人の内一人から小突かれたり、地に投げ倒されたりした。

そうしたことは別に、私の母は眼に障害があつてか、親の躰を受けずに育つたと言われ、デリカシーに欠ける言動が目立った。母の一挙手一投足に私は中学生の終わり頃から軽蔑に近い感情を抱くようになっていた。それが高じて、更に母を憎むようにもなつていったのだ。

故郷の地は元は天皇の牧場があつたと言われる、肥沃とは言い難い砂地で、春先には強い風が吹く度に砂が舞い上がり、空が一面赤く染まる程になつてしまうのだ。昼食時などは砂が御飯にふりかけをかけた状態になり、家の中はどこもかしこも砂だらけになるのであつた。

冬の季節には霜解けの時ともなると、道路が全面ぬかるみになつてしまい、自転車をまともに走らせることもできない始末であつた。そうした負の面が作用して、学校を卒業したらこの嫌で嫌で仕方ない故郷を即離れたいと強く思った。早く大人になりたいとの思いは、祈りに近いものだった。

かと言つて、暗いことばかりではなく、小学生の時はリレーの選手とか、ソフトボールの選手に選ばれたこともあつたのだ。

負の幼・少年期 ②

私の学校嫌いは中学生になっても解消されなかった。何がしかの口実を設けてはサポタージュした。そんな私が、高校に進学することなど、周囲の誰しもが本気で考えていないように思えた。

案の定高校受験に落ちて、ただ漠然とその場限りの思いつきで、夜間の学校へ行きたいと口にしていた。

こうして私は、中学校の教頭の紹介で、中学を卒業すると同時に東京葛飾に上京し、ある建築設計事務所に住込みで就職し、昼働き、夜は御茶の水の日大理工学部付属の定時制工高の建築科に通うことになった。結果的には三年で三つの仕事場へと移り、二つの建築設計事務所は夜逃げの形で辞め、最後は親友の誘いで着いた建築現場の仕事も、彼を裏切る形で辞めていた。

そして遂には嫌で嫌で仕方なかった故郷に逃げ帰っていたのだ。

その後次兄の世話を受け、千葉の市川にある定時制の工高に二年生として編入し、日本橋の靴の卸売りの店に住み込みで入った。こうして足かけ六年かけて工高を卒業するも、日本橋の仕事も夜逃げ同然の形で辞め、またしても故郷に逃げ帰った。

いま、改めて振り返ってみると、何と身勝手極まりない所業であったかつくづく思わさ

れ恥ずかしい限りだ。

ところで時期は不明だが、この時に起きた二つの出来事が鮮明な記憶となって脳裏に刻まれた。

一つ目は小学校に入る前で、学校の運動会の日、校門を出た右手に露店が並んでいて、その一角に古本を売る店があった。そこに並んでいた本がどうしても欲しくて、同サイズの本を持っていた私は、店主の目を盗んで、その本の上に重ねてすばやく万引きをしていた。それが悪いことであるとの認識はあったのだ。

もう一つは、実家に空気銃があつて、庭の木の枝にとまっていた雀を打ち落とし、激しい衝撃を受け、二度と私は空気銃を手にすることはなかった。

このことが私に罪についてより深く思いを巡らす機縁ともなった。思えば私の幼少期は、余りに自己中心そのもので、同情に価するものは皆無であつた。

二、迷走の青年期①

一八から二〇歳頃にかけて、私も漫画ばかりではなくて、幾人かの作家から刺激を受け、ものを書くことに興味を示し始めた。

また、桑原武夫氏のルソーに関する本、鈴木大拙氏の禪に関する本から強い影響を受け、

次第に社会主義思想へと傾いて行った。

それと平行して、幼少年期での苦い経験から、故郷から少しでも遠く離れたいとの願ひがあり、独り旅への思いは日々強くなつて行つた。

車の免許を取得した後、再度東京に出て、大手印刷会社のアルバイトに着いた。しかし、それも短期間で辞め、バイト先で知り合つた仲間五人程で品川埠棹にある冷蔵会社の仕事に移つた。冷蔵会社の仕事といつても、その日暮らしの日雇い人足のことを指し、山谷の労働者が多くいる所なのだ。

そうした中でコツコツと貯めた金と、トランク一つを提げて、遂に私は二三歳のときに独り旅を決行した。故郷から少しでも遠く離れ、思い出したくない暗い過去と訣別したかった。

これから見知らぬ地で新しい生活が始まるのだと、意気盛んな思いが心に充滿していた。冷蔵会社で新たにできた三人の仲間に見送られ、夜行寝台列車で東京駅を発ち、一路岡山へと向かつた。翌早朝に岡山に着き、そこから宇野に直行し、宇高連絡船で高松の地に降り立つた。栗林公園や屋島を巡り、この高松の地で一泊することにした。

次の日は電車で高知駅まで行き、そこから桂浜まで延々と歩き続けた。

桂浜を散策した後、タクシーの相乗りで宿毛・宇和島を経て松山に着き、ここでまた旅

館に一泊することにした。

翌朝早くに松山の職安に行き、仕事先を捜すも、ここでは職は見つからず、早々に諦めて、再び船で一泊して九州の小倉の地へと向かうことにした。

そして、一旦は博多にまで足を向けてみたのだが、再度小倉へと引き返し、駅で買った新聞の求人欄にあった冷蔵会社で面接をし、この地で暫らく腰を落ち着けることになった。

迷走の青年期 ②

小倉の地では、二年ばかり暮らただけで、失恋をきっかけに冷蔵会社を辞めることになった。そして、途中山陰地方や京都などを巡り、どこに落ち着こうかと思案した挙句、結果的にあれ程嫌っていた故郷にまたしても舞い戻ってしまった。

その間、私は両親に一通の手紙さえ出すことはなかった。

父が私の消息を案じて、夢の中で私が死んだとの報せを受けたとたんに目が醒めたのだといった話を母から聞かされても、私は少し感動した程度の反応しか示さなかった。

そのような私であったから、周囲の人たちに迷惑を及ぼし、何度も裏切り行為を働いてきたことへの自覚に乏しく、逆に他人からの冷やかな言動に深く傷付き、怨みやら復讐心を増幅させ、そればかりか順調な時には過度に自惚れ、慢心した。

そんな自身の陰険さに気付くことがなく、相手への批判、批難をくり返してきた。

小・中を通してまともに学校に出席したことがなく、忍耐そのものを極度に欠いた私であった。また特にウツの傾向が強くなり、社会への適応度が極めて低かったのだ。

だからといって、それを盾にとつて己の正当性を主張するなど、実際あつてはならないことなのだ。しかし、そうした理屈も、当時の私には殆んど言っていない程わきまえ知ることにはなかつた。

この時期は聖書も教会も全く縁がなく、ましてや生ける唯一の神の御手が私の歩みの先々で深くかかわっていたことなど、頭のすみにさえ浮かぶことはなかつた。

迷走の青年期 ③

独り旅と称し、働きながら日本全国を渡り歩こうと意気込んで故郷を飛び出したものの、結果的に九州小倉の地で二年程過ごした後、またしても嫌で仕方なかつた故郷に舞い戻る形となつた。

二五歳の節目を迎えて落ち着くことになつたかといえ、決してそうはならなかつた。旅への思いは消えることがなく、しばらくは衝動的に福島地へと出かけたつもりもした。

また、作家の深沢七郎氏と会うため、京成電鉄曳舟駅近くだったと記憶するが、氏の店を訪ねたことがあつた。

次兄の計らいで、見合いをしたこともあつた。しかしいつまでも故郷の実家で居候を続

けるわけにも行かず、働き口を求めて仕事に就いた。それでも私の心は右に左に大きく揺れ動き、いつそのこと寺の坊さんにでもなろうかななどと、とても本気とは言いかねる夢想到に耽つてみたりした。そんな中途半端な日々を送るうち、突然のように、東京品川の冷蔵会社で知り合ったM氏から連絡があった。

M氏についての詳細は省くが、彼は広島出の画家で、久し振りに新宿で会った時は、クラブの社長という肩書きを持っていた。M氏は、近く食べ物の店を出したので手伝ってくれないか、との誘いであった。私は即答こそしなかったが、冷蔵会社時代の仲間が二人すでに加わっていたことから、それ程間を置かずに承諾していた。

その食べ物の店とは、広島風お好み焼のことだった。そして、お好み焼の店を始めたのが一九七五年、広島カープが初めてリーグ優勝を果たした年だった。しかしその時すでに仲間二人は脱落していて、料理のイロハも知らない私が店を任される羽目になっていた。

それに、千駄ヶ谷といっても人通りも外灯もない裏通りで、店を開ける条件からは程遠かった。しかし店は半年後には軌道に乗り、安定したのだった。それは正に想定外のことである芸能人によってテレビなどでとりあげて頂いたことが要因だった。

このお好み焼の店を中心にした人間関係からまったく想像もできない展開が待ち受けていた。

三、転換点の壮年期 ①

教会も聖書も無縁だった私が、不思議としか言いようのない形でキリスト教会での受洗へと導かれた経緯を、ここに記すに至った。

それは、広島風お好み焼の店が軌道に乗り、安定した時期のことだった。私自身もこれまででない程に充実していたのだ。

そのような時期に、中国系オーストラリア人のパーキーさんという名の宣教師との出会いがあった。彼は、お好み焼の店のオーナーが長女で、その次女にあたる方の夫であった。

二人がオーナーの家に泊まることになり、故郷のシドニーに帰る前日の夜に、招かれて彼と対面した。

その彼の第一声が、「神を信じますか？」とのストレートな問いかけだった。途端に私の頭に血が上り、激しく怒って、拒絶したのだ。

次の日、羽田まで二人を車で送ったのだが、別れ際に彼が握手を求めて来た。その時の熱い手の感触が、いまでも強烈に残っている。

パーキーさんは、その後日本に戻って滋賀県のある場所で開拓伝道を始めたと耳にしたのだが、道半ばで天に召された。だから、パーキーさんとはあの日が最初で最後の出会いとなったわけだ。

それからどれ位経っていたらだろうか。遠くの地で働いていたオーナーの一人娘が、実家に戻ってそれ程経たない頃に、自殺によってこの世を去った。

それがきっかけでオーナーが教会へ行くようになり、クリスチャンになった。そうしたことの後には、私はこれまでにない程の激しいウツ症状に見舞われた。

ただ周囲の人たちが疎ましく、自分の存在の意味も価値も見出せず、いま目の前にある店の仕事さえも手が付かなくなっていたのだ。この時期に、オーナーの友人から涙ながらの抗議を浴びた。

それがきっかけで、当時神学生だった荒川氏との出会いを生んだ。彼は、英語の家庭教師をしていた関係で、山中湖に別荘を持つ家の子を教えていた。夏休みに別荘の使用許可を頂いたので子供達と一緒に来ませんかと誘われた。

転換点の壮年期 ②

こうして、山中湖の別荘で荒川氏と会うことになったのだが、彼と顔を合わせるのはこの日が初めてだった。その初対面の夜に、人見知りの激しい性分の私が、いまの苦しい胸の内を洗いざらい話していた。これまで殆どなかったことだ。

それに対して、彼は、終始当惑した面持ちで、一旦別の部屋へと立ち去り、再び戻ったとき、一冊のぶ厚い本を携えていた。それが、私自身初めて目にする聖書だった。

彼は相変わらず無言のまま、『伝道者の書』の『空の空』の箇所を示すのだった。

そのことについて、荒川氏は、後にあの時はああする他なかったと私に告白したものだ。

しかし、当時私は彼のしていることが全く理解できなかったが、その後私のウツ症状は見事なまでに解消されたのだった。この時のことはいまでも信じがたいことの一つだ。

お好み焼の仕事も、何事もなかったかのようにこれまで通り復帰し、さらに私の口から「教会へ行ってみようかな」との言葉まで飛び出していたのだ。

こうして、教会に行き始めて三ヶ月にも満たない時分に、当時浜田山教会の副牧師だった松元師から受洗を勧められたのだった。

浜田山キリスト教会、舟喜信牧師より洗礼式を授かったのが、一九八二年四月一九日、満三四歳の時だった。

このわずか七ヶ月ばかりのスピード受洗に、驚いていた人がかなりいたようだ。

転換点の壮年期 ③

私は、二〇歳前後からものを書くことに目覚め、それが原因で急激に煙草を吸う本数が増し、三〇歳になる頃はヘビースモーカーになっていた。

そのため、煙草だけはどんなことがあっても止められないと、周囲の者に断言までしていたのだ。だから、受洗は断るしかないとの思いを募らせていた。

そんなモヤモヤしたある日の午後、私の体は元々は神さまのものだとの言葉を中心に奥深くで聞き、その直後に、煙草を止めることに素直に従ったのだった。まだ数本残っていた煙草を屑籠に捨てた。

不思議なことに、それ以来全く煙草を断つただけでなく、禁断症状とされるものも私は起こらなかった。

いま、改めて思えば、すべてはパーキー宣教師とのたった一度きりの出会いから始まった。一本の線で辿ってみると、自分から決心して選び取ったと実感できるものは何一つとしてなかった。すべてが私の思いをはるかに越えていた。御霊の存在だけを信じるだけである。

神についての知識はさらさらなく、余りにお粗末なものだった。

それに、受洗の一年後にお好み焼の店を辞めたのだが、定職に就くのもなければ、学びに専念するのでもなく、中途半端のまま結婚することになった。

そのために娘を授かった身で、職場を四、五回も変わる羽目になった。

さら教会の礼拝にも出られなくなった。結婚当初は三番目の兄の店で働いていたのだが、しばらくして店が倒産したために兄とは修復のきかない亀裂を生んだのだった。

そして私は長いこと兄夫婦を許すことができずにいた。この時分の私は、聖書への強い

偏りがあり、教会にも批判的で、一時は異端の教会に足繁く通ったこともあった。それらのことがなぜ起こるのかを、靈的に理解するには、やはり長い歳月が必要だった。

聖書では、神は靈だから神を知るには靈的でなければならぬとあり、また私的解釈をしてはならないとも戒められていた。私はそのどちらも犯していたのだ。だから、救いも福音も、何一つとして確信を持つことができなかった。

四、夢見る老年期 ①

自分史の最終章になるが、私の歩んで来た七〇年をどう締めくくるかは、とても重要なことのように思われた。これは神の救いの証しであって、単に健康や生活が守られて来たからとか、また過去を振り返って感慨にふけることなどは、およそ意味がないからだ。それらを心に刻みつつ、証しの一点に集中するうちに『めいめいが自分の目に正しいと見えることを行なっていた』と士師記にある聖書のことばが心に迫ってきた。

そこでまず思い起こされるのは、最も身近な人間社会の現実についてであった。

一向になくならないいじめ、飲酒運転などによる事故、騒音が原因するトラブル、過労等から引起される自殺等々。それらは私自身が抱えていた問題とも深く関わっていた。

私は、多くの人がそうであると思うのだが、なるべく人と摩擦を起こしたくない、できることなら平穩無事で過ごしたいと、常々願っていた。でも、それを掻き乱す人、ルールを守らず傍若無人に振舞う人に対しては、単に赦せないだけでなく、この世から抹殺すべく、冷酷な反応をごく自然に表わし示してきた。

先ほどの『自分の目に正しく見える』ことを強調すればする程、「正しくないと見える」人がより厄介な存在となつて、そこから際立った対立関係が生じてきた。

それが日々メディアを通し、ニュースとなつて種々な事件が報じられるといった図式をもたらしているのだ。つまり、私が陥つた「正義感」は、ともすると非常に狭い考えによつて自他共に手枷足枷をはめ、より窮屈な生き方を生じさせた。

その結果、自暴自棄というか、ギリシア哲学のある人たちが陥つたように、いわば自殺をも容認する羽目になってしまったのだ。そこに『自分の目に正しいと見えることを行なっていた』と言われる程に、罪人の悲惨さを直に伝えているのだ。

しかし、それを正面から受入れられなかった私は、努めて良い人間になろうと頑張つたことがあつた。だがそれも長くは続かず、冷酷で非情な私の本音が顔を表すのであつた。

夢見る老年期 ②

幾度となく同じ過ちをくり返すうち、己の心というものに疑念を抱かずにいられず、自身の内には何ら良いものがないのではと思うようになっていった。

同時に、身近にある動植物は勿論だが、自分はなぜここに存在するのか、ここに在る自分にどんな意味があるのか、私は窮する他なかったのだ。

こう考えた。自分の存在理由さえ定かでない人間が、ぼう大な予算をつぎ込んで遠い星に衛星を飛ばして「生命の起源」を知ろうとすること自体、神への冒瀆にあたらないのだろうか。

それらのことから導き出された結論は、人は長い歴史を重ねているが、正しい在り方も、平和も、実現したとの証言を聞いたためしかなかった。やはり現実には平和とは程遠い、混乱と混乱の様相さえ呈しているのだ。それが今から三〇〇〇年以上も前の、聖書の士師記にある人々のすがたと、ぴったり重なって見えてきた。

私自身のことを明かせば、神を信じて洗礼を受けて三〇有余年、何度もつまずき、時に優越感に浸っては人を侮り、また時に失意の中で悩み、苦しんだ。

己を正しいとする切羽つまった間違った祈りを献げたとき、主なる神がお聞き下さり、ついにイエス・キリストの十字架のまばゆいばかりの輝きとの出会いを生み、これまで罪

のせいで見ることでできなかつた真実に、心の眼が開かれた。

ここに至ってようやくこのお方こそ罪ゆえにがんじがらめにされていた私を救うために来られた、『わたしは道であり、真理であり、いのちである』と仰せになられるお方、神の御子キリストであることを、明確に知らされた。

罪の奴隷としてただ永遠の滅び（死）を待つしかなかった私を自由にして下さったお方、この生ける唯一の神こそ敵をも愛する愛の根源であられることを、一点の曇りもなく信じらる者とされたのだ。

ついに神は、私の内に奇跡をおこして下さった。確信という奇跡を！

『この方以外には、だれによっても救いはありません。

世界中でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間には与えられていないからです』

使徒の働き四章一二節

愛唱聖句

*詩篇一九篇71節

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。

私はそれであなたのおきてを学びました。

*ヨハネ三章3節

人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。

*ヘブル書二二章2節）新改訳第三版

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。

愛唱賛美歌

*讚美歌三四三番

牧主わが主よ

*讚美歌四〇四番

山路越えて